

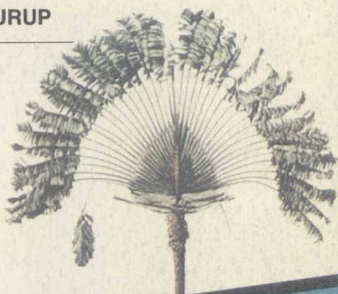
植民地のアリス

島田雅彦



KAKEROMAJIMA / UMASHIMA /
SATSUMAIŌSHIMA /
KAMIJIMA / CHICHIJIMA /
TAKASHIMA, HASHIMA /
MINAMIDAITŌJIMA / ITURUP

TURKEY / ITALY /
RUSSIA / XIZANG /
JAMAICA / KENYA



植民地のアリス

島田雅彦



KAKEROMAJIMA / UMASHIMA /
SATSUMAIŌSHIMA /
KAMIJIMA / CHICHIJIMA /
TAKASHIMA, HASHIMA /
MINAMIDAITŌJIMA / ITURUP

TURKEY / ITALY /
RUSSIA / XIZANG /
JAMAICA / KENYA

・ 著 ・ 者 ・ 略 ・ 歴 ・

島田雅彦（しまだ・まさひこ）

1961年東京生まれ。東京外国語大学ロシア語
学科卒。1983年『優しいサヨクのための嬉遊
曲』を発表し注目される。以後、現代文学の
最先端を切り拓く作家として活躍中。著書に
『夢遊王国のための音楽』（野間文芸新人賞受
賞）『彼岸先生』（泉鏡花文学賞受賞、以上福
武書店刊）『夢使い』（講談社刊）『アルマジ
ロ王』（新潮社刊）等がある。

植民地のアリス

1993年 7 月 1 日 第一刷発行

著 者 島田雅彦
発行者 天羽直之
印刷所 凸版印刷
製本所 青柳製本
発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131 振替・東京0-1730

編集・書籍第一編集室 販売・出版販売部

©Masahiko Shimada,1993

ISBN4-02-256637-X

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

¥1,500-

まえがき

十代の頃、登山をやっていたが、あれは生きるために必要最小限の荷物を背負って、頂上という約束の地に赴く旅のようなものだった。あるいはスポーツとしての巡礼か、人が住めない場所への移住のシミュレーション・ゲームか、いずれにせよ疲労困憊して小休止する時、「こんなところで何やってんだ」と思うことがしばしばだった。

よく観光地でバックパッカーの姿を見かける。必要以上に大きなリュックサック、汚れたジーンズにスニーカー、そしてエビアン製のポリ容器からなるスタイルは万国共通だ。どうもぼくは連中の存在が気にかかる。ヨーロッパの古都の寺院の前で彼らが寝転がっていたりすると、それこそ「こんなところで何やってんだ」といいなくなる。「浮浪者としても生きてゆけるための訓練だ」なんて答えが帰ってくることはまずない。「世界中を旅していろいろな人と友達になりたい」あたりが一般的な答えだろう。

ところでチベットに行った時、巡礼者たちをよく見かけた。彼らはさほど大きな荷物も持たず、時にノロノロ歩き、時にヒッチハイクをし、バスに乗り、ラサを目指す。ラサに着いたら仏像の燈籠にバッテリーをそなえ、道で喜捨を求める。旅費を使い果たしても、帰りの旅費は路上で施して

もらえる。苦難の巡礼も実際にはのどかでのんびりとした旅のようにぼくの目には映った。寺の境内でバター茶を飲みながら世間話に興じている巡礼者にとっては仏のそばならどこでも心安らぐ場所なのだろう。

一方、チベットには漢族の人民解放軍兵士も多数駐屯している。少数民族が住む地域は中国全土の六割以上にも及ぶ。そこには必ず人民軍兵士の姿がある。彼らの移動のスタイルもまた独特だ。家財道具一式と武器を自転車に積み、食料の野菜や生きたままのにわとりをハンドルにぶらさげて移動してゆく。もし、彼らが制服と武器を捨てたら、そのまま移民になれるはずだ。実際、自分が今立っている場所をそのまま自分の生活の場にしてしまう感覚とバイタリティが、移民には必要不可欠だ。十九世紀の終わり頃から、人民軍兵士とほとんど同じスタイルで多くの中国人たちが外国へ渡っていったのだ。そこで、にわかに中国文化とは移民の知恵なのだと思わざるを得ない。何しろ、中国大陸は運命が七転八起する場所だったのだから。

さて、登山者からバックパッカー、巡礼者、人民軍兵士を通過して移民にまで話を広げてしまったが、詰まるところ「こんなところで何やってんだ」と思わない知恵や心得が旅を豊かにする、とぼくはいおうとしている。登山者のように細心に、バックパッカーのように友達を求め、巡礼者のように慎しく、移民のようにその場を自分の生活の場にするつもりで旅をする。そうすれば、訪れた場所はささやかな個人の植民地のようなものになるだろう。

植民地の
アリス

目次

第一部

裸の神様……………加計呂麻島・鹿児島県大島郡瀬戸内町

11

花咲く島の陰に……………馬島・愛媛県今治市

25

流刑地にて……………薩摩硫黄島・鹿児島県鹿児島郡三島村

37

正月のゲリラ……………神島・三重県鳥羽市

51

どこまで行けば国境？……………父島・東京都小笠原支庁小笠原村

63

座礁した炭坑……………高島・端島・長崎県西彼杵郡高島町

77

台風に愛される島……………南大東島・沖縄県島尻郡南大東村

89

鯨の植民地……………択捉島・日本？　ロシア？

103

なががき

123

第二部

ノアの方舟幻想…………アララト山・トルコ
129

荒野の隠者…………カッパドキア・トルコ
141

イタリア発情紀行…………イタリア
157

満月の夜のオペラ…………シチリア・イタリア
173

捨て身のナシヨナリズム…………ロシア
179

チベットのこだま…………中国？
191

象アザラシの箱庭…………ジャマイカ
201

サバンナの東京者…………ケニア
215

あとがき
227

装幀
奥村靱正

植民地のアリス

第一部

裸の神様……………加計呂麻島・鹿児島県大島郡瀬戸内町（1980.10）

地図を見るまでもなく、日本は海にガレキをばらまいたような形をしている。大小三千にも及ぶ離島が何の因果かくつついて、日本という国の体裁を保っている。大きさの問題を抜きにしていえば、本州もまた加計呂麻島や硫黄島と同様の離れ小島なのだ。中国大陆の霸王は日本をそんなふうに見ていた。ちやうど本土の人の目から見た奄美や沖縄の島々のように。

ぼくは日本を東京の視点からしか見ることができない。外国の都市と東京を比較することで日本を認識しようとのみしていた。東京は日本の中心であると同時に一辺境である。そんな思いをよくアメリカ大陸やヨーロッパの都市で抱いた。東京は辺境が内側に折り込まれた都市であり、本来よそ者の植民地と呼ぶべき場所なのだ。

ぼくは外国にいて、東京が懐かしいとか恋しいと思ったことはない。そもそも愛着を感じたことがない。自分の二十何年かの個人史と東京は一致するところがない。東京は勝手に変わって

るだけだ。過去は目に見える形では残っていない。これほどの大都市なのにわずか二十年分の過去すら跡かたもなくなっている。愛着を抱く暇もないというわけだ。江戸の昔から東京は巨大なトランジット・シティだった。どこかへ向かう途中に立ち寄る都市。どんなに長く東京に住んでいてもせいぜい百年。逆に長く居過ぎると、東京はますます異郷の地に変わってしまう。

ところで、日本人のアイデンティティ探しと南島は密接に関わっているらしい。民俗学者は南島を目指し、日本人の根源を探ろうとしている。日本人のふるさとを南島に見ようというわけだ。ぼくはそんなことをする気はない。人々がふるさとという時の感性とは全く逆の意味でふるさとを考え直したい。

ぼくはガリバーのように一人のよそ者として、自分には縁もゆかりもない島に迷い込むだけだ。それは自分をあくまでよそ者として確認するだけの作業になるだろう。一般的なふるさと像を離島に当てはめること自体、無意識の植民地政策である。

ぼくが訪れるのは南島だけではない。東西南北バランスよく訪ねて、自分が抱いてきた日本人にまつわる偏見を相対化できたらと思う。東京人が日本人だという発想に馴れ過ぎたぼくは一度、全きよそ者になって、島国の各地を外国を訪ねるようにさまよってみたいのである。

アフリカ旅行から戻ってきたばかりで、まだ象の夢を見ていたが、無理矢理気分を変えて、奄美群島の一つ加計呂麻島へ向かった。ぼくはこの島のことを島尾敏雄の作品を通じて、知っていた。特攻隊の隊長としてこの島の入江でじっと出撃命令を待っていた体験、村長の娘ミホ夫人と

の生活、時間の感覚が狂ってしまうような神話的空間を実存の不安を通じて描く島尾文学への興味も手伝って、一度は加計呂麻島を訪ねてみたかった。

加計呂麻島は奄美大島の南端に向かい合っており、行政上は大島郡瀬戸内町に属している。二つの島は瀬戸内湾の両岸になっているのだが、渡し船によって結ばれた一つの島といってもいい。もっとも大島側と加計呂麻側とはその雰囲気がこの世とあの世ほど違う。

加計呂麻に渡る船が出ている古仁屋^{こにや}まで、奄美空港から三時間近くかかった。大島の中心地名^な瀬戸まで一時間、瀬戸内町古仁屋まではさらに一時間半、山間を蛇行する道をひた走らねばならなかった。大島も加計呂麻島も緑が濃い。常緑樹の原生林は島影を濃くし、山々は道をくねらせる。カーブのたびに体が左右に振られ、めまいがしてきた。

海沿いを走ったり、谷間や峠を越えたりしながら、気になったのは島の至るところでやたらに土木工事が進んでいることだった。海岸線の景観を無視して、バカスカテトラポットを置く。別に波の荒いところでもないのに。あるいは民家も何もない山あいの崖を崩している。近道を作ろうとしているらしい。回り道したって、三分と違わないのに。

空港から名瀬まで乗せてくれた旅館の主人はブツブツいていた。

——島は土建屋天国ですよ。

行政と建設業者の野合は全国共通だ。「住民の生活が便利になるように」という大義名分が全国どこでも似たり寄ったりのセメント臭い町を作っているわけだ。本当に住民の役に立つ土木工事が行なわれているかは定かではないし、興味もない。橋や道路を作っては壊す「土木的無駄」

は大きな経済効果をとまなう。政治家はこんな信条を各地で実行に移しているだけの話だ。

名瀬から瀬戸内町までは頻繁にバスの便があるわけではないので、タクシーに乗る。信号待ちのない道を一時間以上……いくつ山を越えたか途中で数えるのをやめてしまった。

——まだ日暮れ前だから、お客さん、古仁屋に着くまで二匹は見るよ。

タクシー運転手は山道を横切るハブの話をしていたのだ。瀬戸内町のタクシー運転手は客を名瀬や空港まで運んだあとの帰り路、道路を横切るハブを捕まえて、地元の土産物屋に売るのでという。観光シーズンの時、そのハブは見世物になったり、ハブ酒になったり、塩焼きになったりするらしい。

居眠りしているうちに古仁屋に着いた。思っていたより町は賑やかで、商店街には中学生や主婦が立ち話す姿が目立った。町の第一印象は美人が多いということだった。沖縄の人とも鹿児島の人とも違う独特の顔立ちである。それがいわゆる島美人なのだが、よく自身の偏見と断わったうえでいえば、アルカイックな顔をしている。なぜか山陰山陽地方の美人と重なるのである。少なくとも東京では滅多にお目にかかれない顔であることはたしかだ。

その日の晩は島の案内役を買って出てくれた土産物店の福島君と遅くまで飲んだ。小学生から年増まで幅広い守備範囲を持つ彼はあちこちに電話をかけ、女の子を呼び出そうとした。

——島田さん、『エル・トポ』という映画見たことありますか？

飲みながら、突然映画の話になった。レンタルビデオ・ショップのほとんどのビデオを見尽し